

< 2016年 6月 >

古賀 順子

セーヌ川に浮かぶ ル・コルビュジェ船
「ルイーズ・カトリーヌ号」

5月に降った多量の雨で、フランス北部各地の河川が増水し、水害の被害が続いています。ロワール河が溢れ、水に囲まれたシャンボール城、堤防欠壊が心配されているヴィランドリーの町。黒田清輝が住んでいたロワン川沿いのモレ・シュール・ロワンやヌムールでは、住宅が床上浸水の被害。オルレアン近くの高速度道路では車道が水面下に沈み、乗捨てられた200台以上のトラックや自動車が一週間以上水に浸かったままです。

パリも、5月末から日に日に水位が上がってきました。5月30日・31日(二日間)のパリの降雨量は61.3mm(ル・モンド紙)で、パリの一ヶ月の降雨量に相当します。月間降雨量も175mmと、例年5月の三倍近い記録的な雨が降りました。さらに、上流でも多量に降った雨がロワン川、マルヌ川、ヨンヌ川を經由し、セーヌ川に合流。地面の飽和量も限界に達し、6月4日未明、パリの水位は6m10cmのピークに達しました。30年に一度と言われる大增水で、イル・ド・フランスで4名の犠牲者が出ています。パリのセーヌ川水位は、通常4m以下で、7m10cmを超えるると厳戒警報が出ます。過去最高は1910年1月の8m62cmで、セーヌ川沿いの国会議事堂からボートを漕いで退出する議員の写真があります。次いで、1924年1月7m30cm、1955年1月7m10cm、1959年1月6m20cm、1982年1月6m18cm。5月の大增水は初めて、6mを超えたのは、35年振りになります。普段は車道や並木の散歩道が水に吞まれ、恐ろしいばかりの水量です。木の枝やゴミが、勢いよく濁流に流されていきます。

セーヌ川沿いを走るRER C線の線路には水が流れ込み運転中止、サン・ミシェル駅、クリュニー・ラ・ソルボンヌ駅、オステルリッツ駅は閉鎖されました。セーヌ川沿いのルーブル美術館、オルセー美術館、グラン・パレは閉館をして、作品を避難させる作業が行

われました。

幸いなことに、5日(日)からパリの水位も下がり始めましたが、通常に戻るには一週間はかかると予想されています。水が引いてみないと被害の全体像は掴めませんが、水害が起こる度に、コンクリートで固めた都市の脆さを痛感させられます。

セーヌ川に船を繋留して住んでいる人もいます。水上警備ボートがギリギリで通れる水位で、船が流されたり、衝突しないように監視しなければなりません。オステルリッツ駅前のセーヌ川には、ル・コルビュジェ船が繋留されています。1915年、パリに石炭を供給する目的で造船され、ルーアン・パリ間を航行していたコンクリート船です。1929年救世軍が買取り、ル・コルビュジェに改造を依頼。「アジル・フロタント(Asile Flottante)」(避難船の意)と名付け、住む家のない人たちの救済の役目を担います。長方形の窓、屋上庭園など、一目でル・コルビュジェ作だと分かります。食堂と160床の収容スペースに生れ変わり、1994年まで救済活動が続きます。その後は、コンクリートの傷みも進み、廃船になるところを「ルイーズ・カトリーヌ号財団」が買取り(2006年)、修復プロジェクトが始まりました。2009年、大阪に建築事務所を構えている遠藤秀平氏が「フェスティバル・ドトヌ(Festival d'Automne)」(1972年ポンピドー大統領政権下に始まった文化・芸術奨励支援賞)の枠内で、修復プロジェクトに参加します。

修復後は、建築や芸術文化に貢献する場所として、新たな役割を果たす予定です。

「ルイーズ・カトリーヌ号」協会代表で、修復の指揮を取る建築家ミシェル・カンタル＝デユパール氏、太腿まであるゴム長靴を履いて、増水を心配しつつも、次のように話してくださいました。

『ル・コルビュジェ船は、百年以上セーヌの波に浮いています。パリ市のモットー「波に打たれても沈まず」通り、これからも社会に貢献していきます。遠藤秀平氏の協力で、日仏に架かる新たな橋が出来ます。昨年2015年8月ル・コルビュジェ死後50周年記念には間に合いませんでしたが、来春には修復を終え、日仏の建築に関するオープニングが出来れば幸せです。』